

新聞マンガにみる政治と社会

—横山泰三『社会戯評』を中心として—

東京情報大学 茨木正治

1 目的

この報告の目的は、人物の似顔によらない新聞1コマ漫画である横山泰三の『社会戯評』（『朝日新聞』（1954年～1992年）掲載）が描く、政治報道の描写を分析し、現在の人物偏重の政治漫画画像のみならずマンガ表現のあり方を見直すことにある。政治報道のうち、政治責任との関係が深い政治疑獄事件を分析対象とし、既存の人物重視の1コマ漫画や雑誌マンガと『社会戯評』とを比較し、従来の漫画が読み取れなかった構造的な問題を横山の作品が描き出していることを明らかにする。

2 方法

そこでデータとして、『毎日新聞』（1950年～1953年）掲載の『プーサン』、『朝日新聞』（1954年～1992年）掲載の『社会戯評』を対象として、先行研究ならびに茨木（1997）の分析方法（シンボル分析、レトリック分析）をもとにして、まず横山泰三の「作風」を概観した。後に、造船疑獄が発覚した1954年の『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』掲載の新聞1コマ漫画と同年発行の週刊誌掲載（『サンデー毎日』『週刊朝日』）の漫画において、造船疑獄をテーマとしたものを抽出して、上記と同様の内容分析を行なった。終戦直後からの風刺漫画雑誌が1951年までで相次いで終刊したため、この時期の漫画雑誌における作品の抽出は行わなかった。造船疑獄に関する事実関係の整理として、上記の新聞3紙（の記事を分析に用いた。また、当該汚職事件に関する論評として、上記の社説、投書欄および『中央公論』『文藝春秋』等の論壇誌の論調を用いた。

3 結果

分析の結果、まず横山の作風については、細い線によって描かれる画は、ルーマニア出身でアメリカの漫画家スタインベルグ（スタインバーグ 1914-1999）の影響を受けているとされる（寺光、1990）。戦後、「新夕刊」「新大阪新聞」で新聞マンガを連載し、社会・世相諷刺画の1950年の『プーサン』のキャラクターが、1954年の『社会戯評』で作品として精緻化されたとみられる。次に、横山泰三作品と、他の1コマ漫画および4コマ漫画との「造船疑獄」における比較をした結果、一般週刊誌・新聞掲載の漫画については、「造船疑獄」の主要人物（指揮権発動における犬養健、吉田茂、佐藤栄作、池田勇人等）に焦点化されたものが大半であった。これに対して、人物の描写を動物や事物に模した表現ではあるが、似顔絵的に表現した作品が「社会戯評」にも見ることはできたが、その大半は、贈収賄事件という事件の描写を描くことに焦点が当てられており、政治家個人の責任に向けられていたものは少なかった。

4 結論

以上から、人物の特定を主としない横山泰三の作品は、政治問題の構造的把握に有効であることが推察された。ただし、横山の作家としての経歴がどの程度作風に影響するのか（1950年「噂の皇居前広場」作品の影響など）をさらに詳細に見る必要がある。また、雑誌マンガとの比較をする必要があるため、「黒い霧事件」「リクルート事件」等々の他の汚職事件について描いた作品の分析をすることが課題として残された。

文献

寺光忠男,1990,『正伝 昭和漫画』,毎日新聞社。

茨木正治,1997,『「政治漫画」の政治分析』,芦書房。